

4. 飛驒匠の技と心にみる歴史的風致

(1) 飛驒匠について

①はじめに

奈良時代から平安時代にかけて、税を免じてまでも木工技術者を都へ呼ぶ全国唯一の制度が飛驒に定められていた。飛驒の豊かな自然に育まれた木をいかす技術や感性と、実直な気質を持った飛驒の職人たちは、都での寺社建築などにおいて腕を振るい、その技と心は古代から現代に至るまで伝統的に受け継がれ、「飛驒匠」と称えられてきた。市内には、これら職人の手による歴史的建造物や工芸品などが数多く残されている。また、高山祭の屋台は、飛驒匠の技が総動員して作られた傑作である。

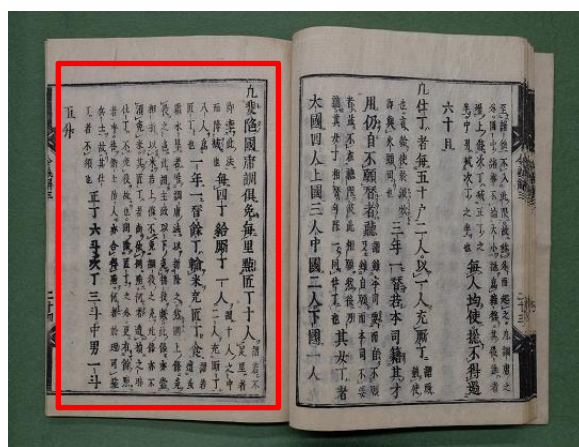
江戸時代に匠の技から発展して生み出された一位一刀彫や飛驒春慶は、高山を代表する伝統工芸となっており、旧城下町の伝統的な町並みやその周辺でそれらの制作・販売風景を見ることができる。

飛驒匠の技と心は、1300年の時を超えて高山の文化の基礎となっており、その物語は「飛驒匠の技・こころ 一木とともに、今に引き継ぐ1300年」として、平成28(2016)年4月、日本遺産に認定された。

②飛驒匠の歴史

飛驒は古代より、豊かな森林資源を利用して木工技術が発達した地であり、「飛驒匠」と呼ばれる優れた技術を持つ職人を数多く輩出してきた。飛驒匠が現存する史料に初めて登場するのは約1300年前で、奈良時代の養老2(718)年に制定された養老令のうち賦役令に規定されている。当時の中央政権は、飛驒国の税(庸・調)を免除し、その代わりに里(郷)ごとに匠丁(木工技術者)8人と^{しちよう}廩丁(炊事係)2人を都へ派遣するよう求めている。その任期は一年とされ、飛驒国から毎年百人余りが出役した。これは飛驒工制度と呼ばれ、全国で飛驒国一国のみに対して特別に定められた制度であった。この規定は、大宝元(701)年制定の大宝律令においても同様のものがあつたと考えられており、飛鳥時代の頃より造宮や造都に参画した飛驒の職人の実績が高く評価されて、庸・調という公民税制の原則を排除してまでも、時の中央政権が必要と認めて制度化したものと考えられる。

奈良時代から平安時代にかけて、都では宮殿や数多くの神社仏閣が建立されたが、中でも平城京や平安京、あるいは西大寺(奈良市)や石山寺(大津市)等では、飛驒匠が卓越



「令義解」より賦役令(左が飛驒工制度の記述)

した技術を発揮した記録が残る。

かにかくに 物は思はじ 飛驒人の 打つ墨縄の ただ一道に

この万葉の歌は、飛驒匠たちが打つ墨縄による直線が、正に人の手によるものと思われなほど高度で、正確な技術の証しであったことを示すものである。「あれやこれやと浮気はしない・・・飛驒人の打つ墨縄が一直線であるように、ただ一筋の道を行くのだ」という恋歌である。奈良や飛鳥の地で、ひたむきに宮殿の造営に、その建築技術を駆使した飛驒匠のたちの姿を彷彿とさせてくれる。

飛驒工制度は鎌倉時代に自然消滅的に終焉を迎えるが、鎌倉時代後期には藤原宗安が、飛驒の大工として初めて受領名と飛驒権守の地位を授かっている。そのため、飛驒匠の始祖といわれ、江戸時代の高山の大工にあがめられた。藤原宗安は、応長元(1311)年に美濃国の長瀧寺大講堂を建立している。

その後の戦乱期には、史料からその名を見つけることが難しい飛驒匠だが、太平の世となる江戸時代から再び、彼らの活躍は見受けられるようになる。これまで寺社建築で卓越した技を見せていた彼らの技術は、民衆の住宅や伝統工芸のなかでも脈々と引き継がれていた。中でも水間一門と松田一門の流れを汲む民家は今でも高山市内で見ることができ、傑作として高い評価を受けている。また、一位一刀彫や飛驒春慶に見られるように、地域に密着した伝統工芸の中にも、飛驒匠の技は脈々と受け継がれていった。

さらに、江戸時代に始まった高山祭においては、時代の流れとともに絢爛豪華となっていく祭屋台の制作に、飛驒匠の技術が存分にいかされた。屋台は大工、彫刻、漆をはじめ、鋳金具、鍛冶など、高山の職人の技術を総動員して作られた傑作である。

これらの技術は、建築や伝統工芸をはじめ、家具産業においても現代に受け継がれており、平成 28(2016)年には G7 伊勢志摩サミットで使われた会議用テーブルと椅子の製作により、飛驒の技術が世界に注目された。そして、今日も飛驒地方には全国から飛驒匠の技術と心を受け継ぎたいと多くの若者が集まってきている。



名工・二代目水間相模にゆかりのある法華寺番神堂



名工・江黒尚古の双龍彫刻(高山祭屋台)

③水間一門と松田一門の建築

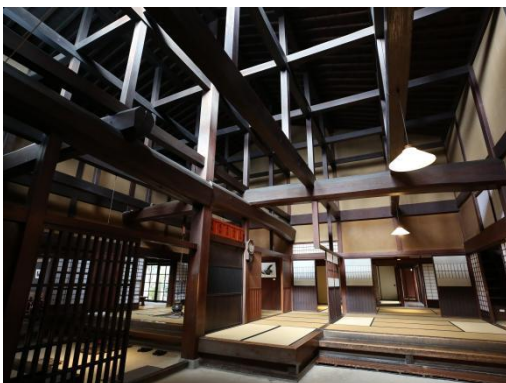
奈良時代から平安時代にかけて、都での寺社建築で名を馳せた飛騨匠だが、江戸時代以降、彼らの技は飛騨の寺社建築や民家建築の中で更に花開くこととなる。

近世・近代に活躍する大工一門の代表格が水間一門と松田一門である。高山市内には、お互いが競いあつて建てた寺社や民家が多く残っている。水間一門は、飛騨匠の始祖と伝わる飛騨権守・藤原宗安の直系とされ、伝統的な建て方の社寺建築を得手とし、代々水間相模^{みず ま さがみ のかみ}守を名乗った。一方、江戸時代前半より活躍したとされる松田一門は優れた彫刻を施す流派で、弟子の中には谷口与鹿^{よろく}など、屋台彫刻の名手も出た。

これまで機能性を求められた住宅に、新しくデザイン性という境地を切り開いたのがこの2つの一門であり、彼ら一門の流れをくむ近代民家の代表作には、大新町の日下部家住宅や吉島家住宅、旧丹生川村^{たうえ}の田上家住宅などがある。いずれも良材を匠の高度な技術で仕上げてあり、優れた意匠とともに長く大切に使えるような工夫が随所に見られる。

水間一門の西田伊三郎が建てた吉島家住宅を見ると、棟まで通った大黒柱に大梁がかけてあり、繊細な空間を演出している。一方、松田一門の川尻治助^{じすけ}が建てた間口の大きい日下部家住宅では、大胆に渡した大梁を大黒柱が下から支えており、力強さが表現されている。いずれも飛騨匠ならではの技と、大空間を再現する点は共通しているが、そうしたところにそれぞれの特徴が表れており、卓越した技術と感性は、甲乙つけがたい。

また、江戸時代の町家や農家は身分制度による建築規制もあつて、軒高の低い建物が多かったが、明治時代になると、経済的に恵まれた家では、名工にその匠の技を存分に発揮させて家を建てさせた。明治時代の大火後に再建された日下部家や吉島家などの家屋が特に立派なのはそのためであり、明治という時代の流れは、飛騨の建築に多大な推進力を与え、民家建築史の扉を大きく開いた。

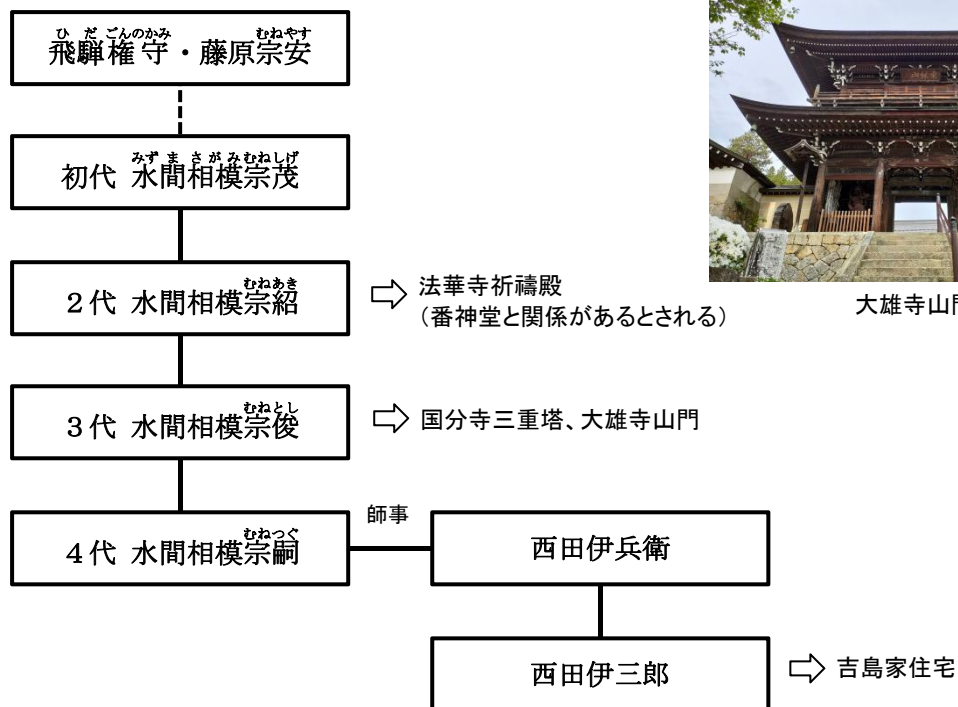


吉島家住宅の外観と内部(水間一門)

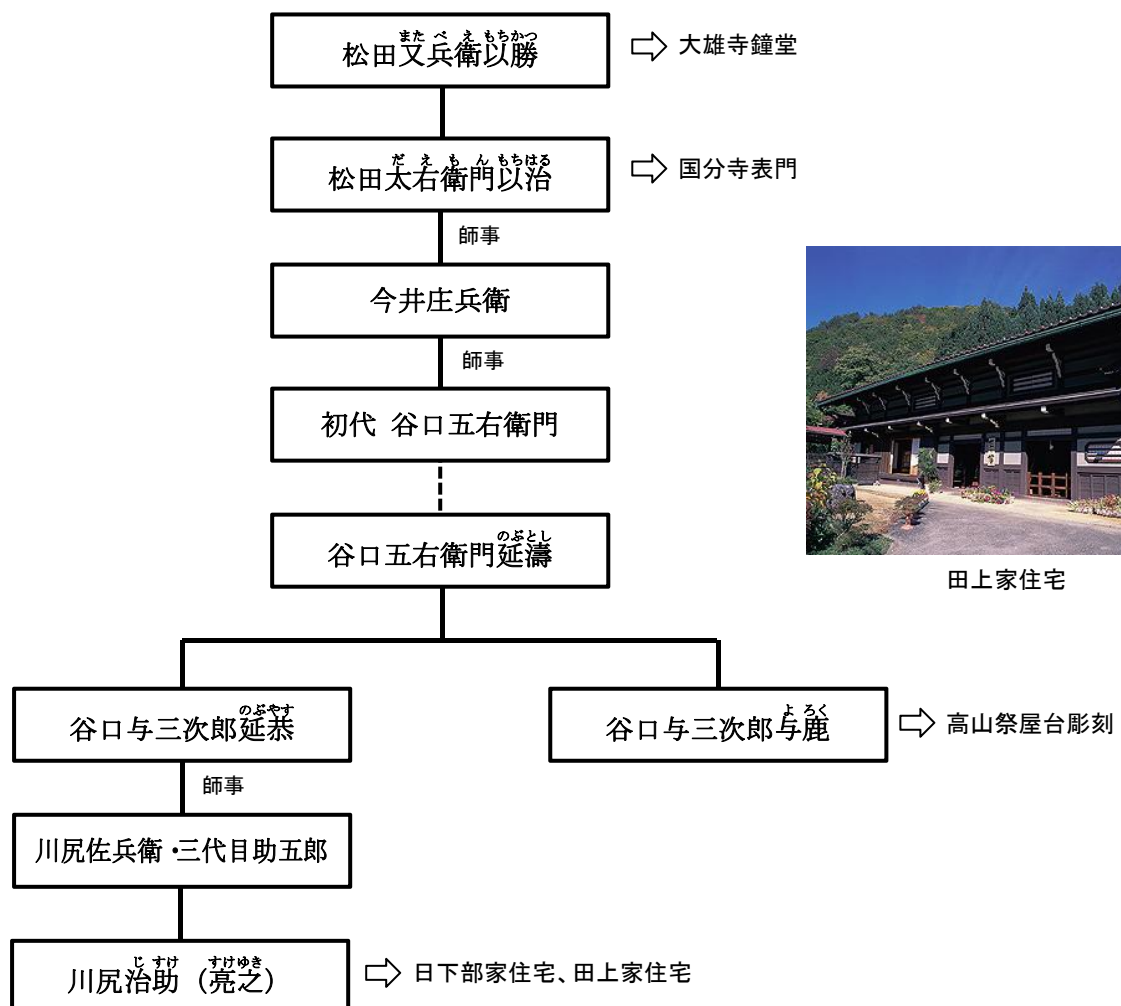


日下部家住宅の外観と内部(松田一門)

●水間一門



●松田一門



（２）飛騨匠を受け継ぐ活動に関連する建造物

①津田彫刻（一位一刀彫）

津田彫刻は本町一丁目にある一位一刀彫の工房兼販売店で、天保14(1843)年の創業以来現在の場所で営んでいる高山で最古の一位一刀彫の彫刻店である。

本町一丁目周辺は、明治5(1871)年の大火ではほぼすべての建物が被災したとされる。津田彫刻には明治38(1904)年の登記書類が残されており、記載されている情報が現在の建物の状況と同じことから、明治時代の建物であると考えられる。昭和30年代には、本町通りの歩広めに伴って曳家し、現在の位置へ移された。

津田彫刻では、津田亮友・亮佳(彫号)の2人の伝統工芸士が、歴史ある家業と伝統の技を受け継いでいる。



津田彫刻の建物

②福田屋漆器店

福田屋漆器店は上三之町と、安川通りとの交差点の北西の角地に位置する漆器の販売店である。

建物は明治中期のものとされ、明治21(1887)年発行の『商工技藝飛騨之便覧』では衣服問屋「野村莊八郎商店」として店舗の様子が版画で描かれている。明治後期に呉服商であった土川家が取得し、土川商店(のち土川呉服店)として使われた。『濃飛官民之宝鑑』(明治44(1910)年)や『飛騨写真画報』(大正12(1923)年)には、その頃の写真が掲載されている。

昭和28(1953)年に、大新町で漆器店を営んでいた福田屋が建物を取得し、現在の場所で営業をはじめ、営業にあわせて外壁がモルタルに変更され、内部が改装された。平成のはじめに修景され、現在の外観となっている。



福田屋漆器店の建物

(3) 飛騨匠を受け継ぐ活動

①一位一刀彫

飛騨の木彫りが飛騨匠たちによって、寺社建築における彫刻や高山祭の屋台を飾る彫刻へと発展していく中で、江戸時代末期、一位一刀彫は高山の根付彫師、松田^{すけなが}亮長により生み出された。幼いころから彫刻に興味を持ち、成長してからは日本各所にある名勝の地を歴遊。彫工の名家を訪ねる傍ら、古い神社仏閣にある彫刻を研究し技を磨いた。亮長が奈良を訪れた際、奈良一刀彫を目にしたときのこと、奈良人形ともいわれるその人形は鮮やかな色彩が施されていたが、木の風合いが失われていることを惜しみ、木肌そのものをいかした彫りはできないものかと考え、飛騨の銘木、イチイの木を使うことを思い立つ。イチイは木目が美しく、朝廷に献上する^{しやく}笏の材として使われていたが、亮長はこの木を使うことで彩色に頼らず、木の美しさ、作品の風合い、彫り手の技量をともにいかす彫刻として一位一刀彫を考案したのである。

一位一刀彫は一本の彫刻刀で掘られる必要はなく、亮長も作品に合わせた刀の使い方をしている。仕上げにトクサ・ムクの葉で磨き、ロウをひく手法も、亮長によって始められたものである。一刀彫と呼ぶのは、一彫り一彫りに魂を込めて彫ることからであり、原木の木目の流れ、白太(辺材)、赤太(心材)といった色のコントラストを巧みに利用して、大胆かつ繊細な彫りの技によりイチイの特徴をいかすとともにその味を一層深める。また、イチイの木は、年月が経つにつれ木肌や木目の色艶が深くなり美しい飴色に変化するため、更に大きな魅力となる。自然が育んだ木の持つ生命力を、木地をいかすことで再現した迫力こそ、飛騨匠が今に伝え続ける伝統工芸であり、お土産品だけでなく、縁起物として結納の品や贈答品とし



高山祭屋台のくりぬき彫刻(谷口与鹿作)



松田亮長作の根付



一位一刀彫の制作風景



一位一刀彫の作品

て使われたり、高山祭の際に裃のアクセサリとして根付が使われたり、と、江戸時代から今に至るまで様々な場面で親しまれている。

昭和 29(1954)年には彫師たちによって飛騨一位一刀彫協同組合が組織され、今も組合が中心となって伝統技術の維持や継承、ブランドの力の強化が図られている。また、一位一刀彫は昭和 50(1975)年 5 月に、国の伝統的工芸品の指定を受けている。

市内には、今も複数の一位一刀彫の工房兼販売店が所在しており、伝統の技を受け継ぐ彫師たちが腕を振っている。

旧城下町の二つの重要伝統的建造物群保存地区にも数軒の彫刻店があり、仏像をはじめ、七福神や干支などの縁起物の彫刻のほか、根付やアクセサリなどの小物など、匠のノミさばきによる様々な作品が陳列販売され、歴史的な町並みの情緒ある雰囲気に一層深みを与えている。

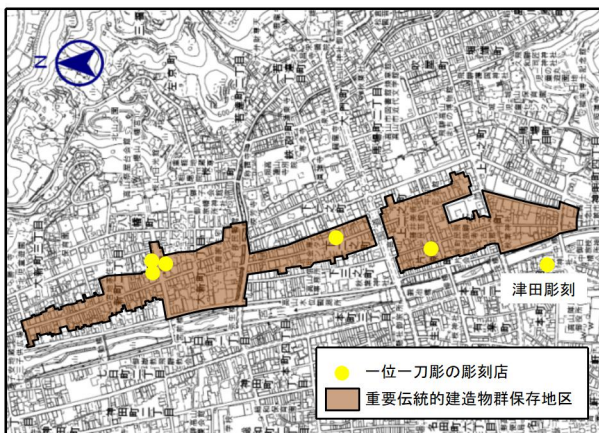
これらの店舗では、店内において彫師による制作実演を行っているところもあり、間近で匠の技を目にすることができる。このような店舗からは製作の音が聞こえると共に、木の香りが漂ってくる。



彫刻店内での制作実演



津田彫刻の建物



旧城下町内の彫刻店の位置



伝統的な町並みの中の彫刻店

②飛騨春慶

江戸時代初期の慶長年間(1596～1615)、高山城下で神社仏閣の造営工事に携わっていた大工棟梁の高橋喜左衛門が、仕事中に打ち割ったサワラ材の木目の美しさに魅せられ、その板を使って蛤の形をした盆を作り、これを金森二代可重の子・重近(後の宗和)に献上した。重近は動きのあるその木目に感動し、御用塗師の成田三右衛門に木目の美しさをいかして漆を塗るように命じた。そこで三右衛門は、木地の自然な美しさをいかすために透き漆でその盆を仕上げた。これが飛騨春慶の始まりと伝えられている。



飛騨春慶の製品

誕生当初は茶器としての利用がほとんどで、主に貴族のための工芸品であったが、やがて江戸時代中頃から庶民も手にするようになり、しだいに盆や重箱など一般生活用品が多く作られるようになった。

飛騨春慶は、天然木の木目をいかした木地を作る木地師と、漆を塗る塗師が、それぞれ受け継いできた伝統的な技法を駆使し、二人三脚によって生み出される。木地の種類は大きく分けて、板物(盆など)・曲物(重箱など)・挽物(椀など)がある。木地師による木地の加工においては、特に板を平面から立体的に仕上げる曲物細工の技法に優れている。また、木地師は加工だけでなく、良材を選ぶために丸太の選定から行い、その木の含水率などを含めて塗師に渡すまでの全工程を知り尽くしている。そして、木地師が加工した製品を塗師が透き漆で仕上げていく。飛騨春慶の特徴は木地をいかすところにあり、他の漆器が木地を塗り込み、沈金・蒔絵などで豪華絢爛を目指すのに対し、飛騨春慶は美しい木目を見せて木地そのものを引き立てることに主眼を置く。木の性質を見極め、その美しさを引き出す技と心こそ、飛騨匠の精神を受け継ぐものであり、木地師と塗師、双方の匠が生み出す琥珀色に輝く飛騨春慶は、現在も多くの人を惹きつけてやまない。そして、それらは老舗料亭での膳や汁椀、茶托など上品で上質な什器、また一般家庭での客



木地師の作業風景



塗師の作業風景

のもてなしなどに使用され、高山の生活文化に彩りと上品さを添えている。

昭和 36(1961)年には塗師や木地師、販売店等によって飛騨春慶連合協同組合が組織され、今も組合が中心となって伝統技術の維持や継承、ブランドの力の強化が図られている。また、飛騨春慶は昭和 50(1975)年 2 月に、国の伝統的工芸品の指定を受けている。

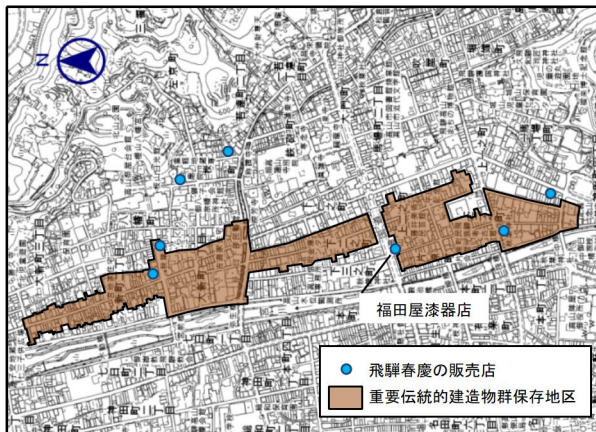
飛騨春慶は、木地の加工、塗り、販売を分業で行うことから、それぞれの制作作業と販売は別々の場所で行われる。その作業場所の確保の面から、多くの制作場所は市街地の中心部から外れたところにあるが、飛騨春慶を専門に扱う老舗の漆器店は、旧城下町の重要伝統的建造物群保存地区とその周辺に数軒ある。また、4 月から 10 月まで毎月開催される骨董市である我楽多市^{がらくたいち}等にも多く出品され、好事家が足を運ぶ。店先や市に並ぶ飛騨春慶の存在が、風情ある歴史的町並みに上品さを与えている。



福田屋漆器店の建物



漆器店の店内



旧城下町内の飛騨春慶店の位置



我楽多市で販売される飛騨春慶

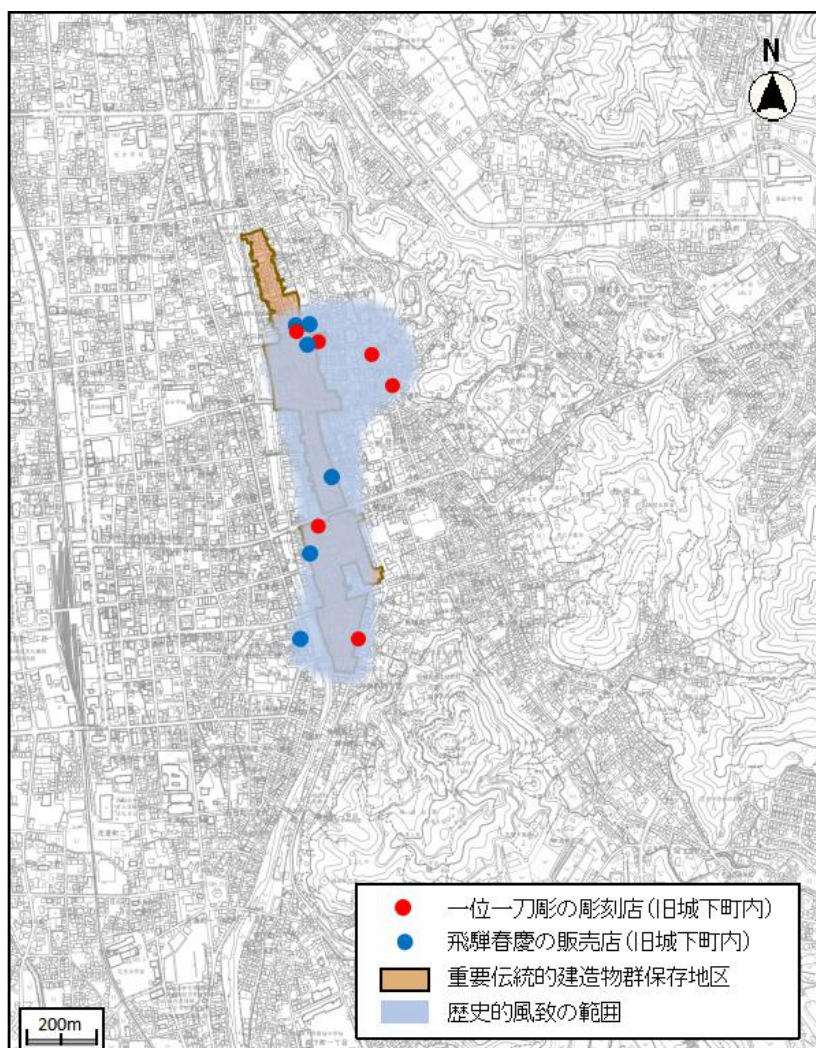
(3) まとめ

豊かな森林資源に恵まれた飛騨の地で、良材を活用した木工技術が発達し、奈良時代、税を免じてまでも木工技術者を都へ派遣する全国唯一の「飛騨工制度」が生まれた。飛騨の豊かな自然に育まれた木をいかす技術や感性と、実直な気質は古代から現代まで受け継がれ、その歴史の中で一位一刀彫や飛騨春慶などの伝統工芸が誕生するとともに、その高度な技が結集して高山祭の絢爛豪華な祭屋台が作られ、今も職人たちの技により修理されながら維持されている。市内には、中世の社寺建築や近世・近代の大工一門の建築物、名工による彫刻など、関連する遺産が数多く残されており、様々な場所で飛騨匠の技と心に触れることができる。

また、木の性質を見極め、その美を作品に表現する技と心は、建築分野のほか、高山を代表する伝統工芸となった一位一刀彫、飛騨春慶においても今に受け継がれている。そして、その制作風景や販売風景は、旧城下町の重要伝統的建造物群保存地区とその周辺で目にすることができ、歴史的な町並みの趣に一層深みを持たせている。

飛騨匠の技と心は高山の文化の基礎として、ものづくりの職人たちのみならず、高山市民すべての誇りであり、高山を代表する歴史的風致である。

飛騨匠の技と心にみる歴史的風致の範囲



■コラム「飛騨の家具職人」

西洋の家具技術と飛騨匠の伝統技法。この2つは、大正9(1920)年、二人の旅人が高山を訪れたことによって出会った。それまで、飛騨匠の技は日本文化の中でのみ育まれ、技法をいかしてきたが、西洋の曲げ木技術を学んだ旅人が飛騨を訪れたときに、この地に椅子を作るための西洋の技術を伝えた。

木を知り尽くしている職人たちは、今日的にも難度の高い、曲げ木技術を取り入れた椅子を作るために試行錯誤を繰り返し、それから2年後、春慶塗を施した椅子が世の中に送り出されることとなったのである。

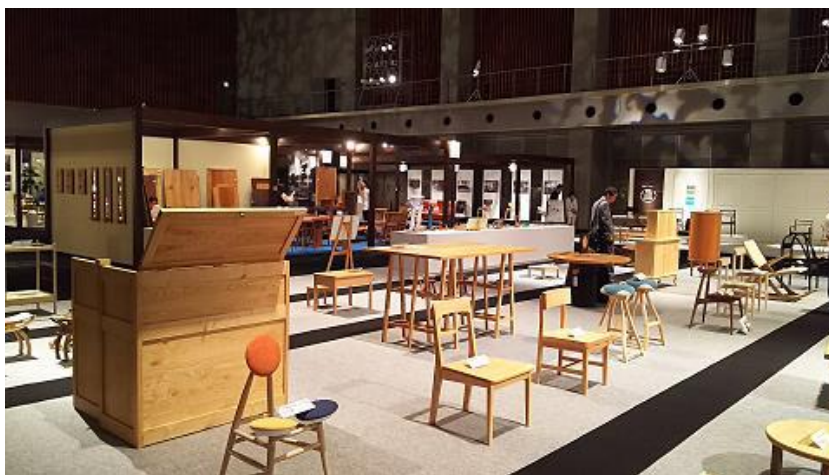
その後、高山には相次いで家具製造企業が創業し、飛騨の家具は地場のリーディング産業として成長した。以降、日本の食スタイルが「茶の間のちゃぶ台」から「椅子のダイニング」へと大きく移行したことを契機に、本格的な椅子生活普及へのきっかけとなり、都市部でのブランドアピールを他生産地に先駆けて行った高山は、現在も日本の家具の5大産地の一つとして確固たる地位を築いている。



曲げ木椅子

高山の家具職人たちは、現代の飛騨匠の中核として、今も伝統の継承と新しい技術のチャレンジを続けている。そして、今でも全国から木工職人がその技術を学ぶために高山を訪れる。

また、近年の国内市場の厳しさや海外生産企業との価格競争に対して、ブランド力の強化を図るため、飛騨木工連合会では製造生産基準を定め、その基準を満たしたものを「飛騨の家具」として認定し、品質と信頼の確保を図っている。



飛騨の家具フェスティバル